令和4年度　学校評価表 （後期）

三原市立大和小学校（校番20）

a 学校教育目標	夢や目標に向かって，自ら伸びる ともに伸びる児童の育成 （校訓） 自ら伸びる ともに伸びる	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】 自分を愛し，夢を語る児童の実現 【ビジョン】 児童，教職員，保護者が「夢や目標に向かって，自ら伸びる ともに伸びる」という教育風土がある学校 ＜めざす学校像＞ 「自ら伸びる ともに伸びる」という教育風土のある学校 ＜めざす子ども像＞ 「規律あるかかわり合いを通して，自ら考えともに伸びようとする子ども」 ＜めざす教職員像＞ 「児童を守り，育て，育む」ことを自覚し，実践できる教職員

評価計画					自己評価									改善方策	学校関係者			
								10月	2月	i	j	k	n	l 評価			m	
c 中期経営目標	d 短期目標		e目標達成のための具体的方策（大枠）	f 評価項目	指標	目標値		h 達成値	h 達成値	達成度	評価	結果と課題の分析	改善方策	イ	ロ	ハ	コメント
確かな学力 主体的な学びを実現する取組を通し学力の定着と主体的・対話的で深い学びを追究する	【授業改善による学力定着】 各学年で身に付ける力を付けるとともに，親和性の高い集団をつくる			単元末テスト（国語，算数，社会，理科）の学年平均値が指標に示す点を超える教科数（20教科） 【評価時期】（1学期末・2学期末）	平均値 1・2年生（90点） 3・4年生（85点） 5・6年生（80点）	20／20 教科	1学期末 11／20 教科 【55%】	2学期末 17／20 教科 【85%】	【87%】	B	・単元末テストの学年平均値で，国語では，5／6，算数では，4／6，理科・社会では，4／4の達成であった。全教科，平均点が1学期より上昇している。「できる・できそう・分かった」と児童が思える授業改善のため，それぞれの教科で取り組むことを共有した結果である。 ・学力定着に課題のある児童の単元末テストの結果を表で整理し，個に応じた支援を行った。単元内自由進度学習に取り組んでいる学年がある。例えば，2学期の算数では，単元内自由進度学習を6／7単元行い，低学力層の児童9名中全員が1学期の平均点より2学期の平均点が＋10.7点上昇している。	・引き続き「できる・できそう・分かった」と児童が思える授業改善を行う。今年度の取組を活用し改善していけるようデータ等で整理していく。 ・児童の実態を把握し，個に応じた支援をしていく。「自己決定の場」を工夫し，主体的な学びとなるようにしていく。その一つとして「自由進度学習」を全学年で取り入れていく。「単元内自由進度学習」の単元を増やし，学習形態・方法の工夫をしていく。	○			・「できる，できそう，分かった」と感じる授業改善に取り組んでいることで，落ち着いた学習態度が形成されつつある。 ・単元内自由進度学習の取組は「できた」「わかった」と思える授業づくりにつながっている。 ・授業の中で，「読む・書く・聞く・話す活動」を取り入れていること，「適切な教育機器」を活用していることは，児童の学習意欲の向上につながっている。今後も継続した取組を期待する。
		その学年で身に付けるべき学力を確実に定着させる	・45分間の授業で，基礎基本の力を身に付けるための授業改善【研究部】 ・児童の主体的な学びにつながる「問い」のある授業改善【研究部】 ・学び方の選択肢と自己決定のある授業改善【研究部】 ・教科書の文章を「読む」ことができる授業改善【研究部】 ・教材文等のことばに根拠を求める授業改善【研究部】 ・「聞く」ことを大切にし，ねらいを達成するためのペアやグループによる学習のある授業改善【研究部】 ・通過率40%未満の児童への具体的な対応がある授業改善及び「白宅タイム」の充実【研究部】 ・学習規律の徹底し，親和性のある学習集団づくり【研究部】 【生徒指導部】 ・ねらいを達成するために，ICT機器等を活用した授業改善【研究部】	全国平均以上の教科数	13／13 教科	11／13 教科 【85%】											
				児童質問紙よりアンケートによる調査 （あ）「国語の・算数の・理科の・社会の授業がよくわかる」教科ごとに「総合評価する」 （い）「授業では，課題や問題について自分の考えをノートやプリントに書いている」 （う）「授業では，課題や問題について自分の考えを話している」 （え）「授業では，自分の考え方や解き方と比べながら友達や先生の話を聞いている」 （お）「授業では，課題を解決するために，進んで資料を集めたり取材をしたりする」 （か）「ICT機器を使って，問題に挑戦したり，まとめたり，調べたりすることを進んでしている」 【評価時期】（1学期末・2学期末）	肯定的評価の割合	90%	83.1% 【92%】	83.7% 【93%】			・「授業がよく分かった・たのしい」と肯定的評価をした児童の割合は，国語88%，算数90%，体育91.8%，理科88.8%，社会84%で，全体の平均が83.7%であった。国語・算数・社会は，上昇している。低学年は，9／13上昇しているが，高学年は，4／13で上昇したものが少ない。 ・「授業では，課題や問題について自分の考えをノートやプリントに書いている」と肯定的評価をした児童の割合は，77.7%から77.8%と保ちいてある。80%以上達成した学年が6学年で，低学年は1学期末より上昇している。高学年は，平均84%と低く課題がある。 ・「授業では，課題や問題について自分の考えを話している」と肯定的評価をした児童の割合は，69.7%から67.3%に減っている。自分の考えを持つことに課題があるので，その後の自分の考えを話す場面でも課題が大きい。 ・「授業では，自分の考え方や解き方と比べながら友達や先生の話を聞いている」では，児童の肯定的評価の割合が，84.8%から，85.2%と少し上昇している。依然として話より聞く方が高い傾向がある。 ・「進んで資料を集めたり取材したりしている」と肯定的評価をした児童の割合は，62.5%から73.8%に上昇している。低学年で大きく上昇している。 ・「ICT機器を使って，問題に挑戦したり，まとめたり，調べたりすることを進んでしている」と肯定的評価をした児童の割合は，87.2%から83.5%に減少している。目標値より高い学年は2学年で，目標値に近い学年を入れると，4／6学年になっている。	・各教科で取り組むことを共有化し，児童が「できる・できそう・分かった」と思える授業改善に引き続き取り組む。 ・結果ではなく，過程を評価し，自己肯定感を高めていくようにする。そのために，過程を細分化し，全員がスモールステップで進んでいけるよう工台を揃えて達成感を味わわせるようにする。 ・みんなで学ぶ楽しさを味わえるような学習集団作りに取り組んでいく。 ・構成的グループエンカウンター等を行い，自己表現ができる学級づくりに取り組んでいく。 ・アンケート項目「自分の考えを話す」ことについて，ペアや小集団の中で話す場を設定していく。 ・「ICT機器の活用」「自己決定の場」「学習形態の工夫」について，それぞれの学年の取組を交流し，取組の共有化を図る。	○			
				肯定的評価の割合	90%	77.7% 【86%】	77.8% 【86%】										
					90%	69.7% 【77%】	67.3% 【75%】										
					90%	84.8% 【94%】	85.2% 【95%】										
					90%	62.5% 【69%】	73.8% 【82%】										
					90%	87.2% 【97%】	83.5% 【93%】										
豊かな心と親和性の高い集団 安心して学べる学習環境の基盤となる，規範意識の醸成を図るとともに，自他を尊重する心情・態度を育成する	【規範意識の育成】			QUアンケートの結果 【評価時期】（5月下旬・11月下旬）	学級生活満足群に位置付く児童の割合70%以上の学級数	9／9 学級	0/9学級	2/9学級	22%	D	・9学級の学級生活満足群に位置付く児童の割合の平均は50．7%であり，70%という目標を大きく下回るが，若干高くなっている。効果的だった取組を共有し，学習集団作りにいかしていく必要がある。 ・1次支援（A）の割合も2～6学年5学級の平均が44．2%であり，前期より向上したが50%以上という目標には及ばなかった。学習面，生活面両方の取組を進める必要がある。	・暴言や暴力，指導妨害などの事案には毅然と対応する。また，きまりを守っていないことについては素早く対応し，生徒指導事案の未然防止を全職員で行う。 ・引き続き「できる，できそう，分かる」授業改善等を行えば生徒指導事案は減少するという考えをもち，毎日の授業づくりを行う。	○			・一人一人の児童に寄り添った生徒指導に取り組んでいることが，児童の規範意識や自己肯定感の向上につながっている。今後，継続した取組を期待する。
		児童に所属意識を持たせ，円滑な集団生活の基盤となる（規範意識・ルール・マナー等）を身に付けさせる	・生活のきまり，学習規律チェック表に基づく積極的な生徒指導を日常的に実施【生徒指導部】 ・生活や学習の場で自己決定する場の設定【生徒指導部】 【研究部】		1次支援（A）の割合が50%以上の学級数	9／9 学級	0/9学級	0/9学級	0%	D							
	【共感的な人間関係づくり】			児童質問紙によるアンケート調査 （あ）「学校のきまりやルールを守って生活をしている」 （い）「自分にはよいところがある」 （う）「自分のよさを周りの人に認められていると思う」 （え）「将来の夢や目標を持っています」 （お）「努力すれば，自分もたいていのことは出来ると思います」 （か）「地域のことが好きです」 （き）「困ったことがあったとき，先生や友だちに相談できる」 【評価時期】（1学期末・2学期末）	児童質問紙肯定的評価の割合	95%	90%	96%	87.4%	B	・児童質問紙によるアンケート調査の結果，「学校のきまりやルールを守って生活している」について肯定的評価をした児童の割合は96%と増加しており，児童の多くが学校のきまりを守るよさに気付き，意識して生活していることがわかる。 ・自己肯定感に関わる（い）～（お）の項目については肯定的評価が若干増加したが，いずれも80%台にとどまっており，引き続き意識して取り組む必要がある。 ・「困ったことがあったとき，先生や友だちに相談できる」についても，肯定的評価が78%と依然として低く，今後も心して相談できるよう取組を続ける必要がある。	・規範意識を高める取組を続けて行い，ルールを守って生活することのよさを実感させる。教職員で「ほめポイント」を共有し，同じ方向でほめることで，安心・安全な環境づくりをするとともに，児童の自己肯定感を高める。 ・小さなことから児童のよさを認める声掛けを続け，自分のよさに気付けるようにしていく。また，異学年での交流の場を計画的に設け，児童同士でも認め合えるような取組を行う。 ・行事や学習の中で「やってよかった」「がんばったらできた」という思いを持てるように，自己選択やスモールステップで達成できるような場の工夫を行う。 ・児童の実態交流を継続し，担任だけでなくすべての教職員で児童の情報を共有し，相談できる体制を整えていく。また，児童同士のつながりを作っていく学級づくりを行い，困ったときには助け合える学級風土を育てる。	○			・具体的に視点を決め教職員全員で児童を褒めていく取組は，自己肯定感の向上に生かされている。 ・児童アンケートの回答に理由を書く欄を設定し，その記述からさらに取組方法や改善策等を考えていくのも一つではないか。 ・一人一人の児童に寄り添った生徒指導に取り組んでいることが，児童の規範意識や自己肯定感の向上につながっている。今後も継続した取組を行ってほしい。
		児童に，他者とかかわり合う場面を与え，その中で，自己肯定感を高めさせるとともに，相手を大切にする心と態度を身に付けさせる	・全ての児童に，学校内（学校外も含めて）に学びの場がある取組【生徒指導部】 ・全ての児童が，困った時に学校の中に相談できる人や場がある取組【生徒指導部】 ・「聞く」ことを大切にした授業改善【研究部】【生徒指導部】 ・内面に迫る道徳科の授業改善【研究部】 重点項目 B「思いやり」（B－6・B－7） C「よりよい学校生活・集団生活の充実」（C－14・C－15・C－16） ・ねらいをもった児童同士の交流の場がある学級活動【生徒指導部】 ・1校1貢献活動の実施【教務部】		90%	81%	83%										
					85%	81%	86%										
					95%	83%	83%										
					95%	85%	88%										
					90%	101%	99%										
					100%	74%	78%										
健やかな体 生涯にわたって健康を 保持増進し，豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する	【生涯にわたって健康づくりをしよとする健康教育の充実】 【生涯にわたって運動しようとする心情の育成につながる授業改善】			児童質問紙よりアンケートによる調査 「体育の授業は楽しい」 「感染症防止のためにマスク着用，手洗い，3密を防ぐことをしている」 「※アンケート」 【評価時期】（1学期末・2学期末）	肯定的評価の割合	「体育の授業」95% 「感染症」100% 「※アンケート」100%	「体育の授業」91% 「感染症」95.4% 「※アンケート」	「体育の授業」86% 「感染症」96% 「※アンケート」	【91%】	B	・12月に行ったアンケートの結果，体育の授業が楽しいという項目での肯定的評価は86%と目標値に達しなかった。 ・感染症対策においては，肯定的評価は高い数値を示している。感染症が流行したため，児童一人一人に身をもって感染対策で「自分で自分を守るんだ！」という気持ちが数字に表れている。 しかし，少人数ではあるが，流行時期を過ぎると体育科の授業や休憩時間にマスクを外した後，再び付けるのを忘れてしまったり，手洗いが徹底できていなかったりした面も見られた。	・運動能力向上に向けて，運動が苦手な児童も進んで活動できるよう，運動意識の向上を目指す。体ほぐしや体つくりの運動を各単元の予備運動として取り入れるため，8月には教職員研修として楽しくとりくむ指導方法を研修することができた。 また，ICT機器を使い，順序立てて，ゆっくり，視覚理解のしやすい教材を用いて，「楽しい」，「またやりたい」という気持ちを持たせるよう工夫する。 ・感染症対策の徹底を図る 感染症対策指導において，意識統一するために連絡会等で児童の様子や学校のきまりや統一事項を確認する時間を設けていく。 感染状況に合わせて自分で自分を守るために今どういう行動が大切なのかを一人一人が考えて選択できる力が今後必要となる。	○			・クラブ活動等，コロナ禍の状況ではあるが目的意識をもたせたり，工夫した活動を行いながら，異学年交流を進めており，「やってよかった」という思いをもたせる活動になっている。
		児童に確かな目標を持たせ，生涯にわたって健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現しようとする心と体を育成させる	・感染症を防ぐための取組の実施【健康安全部】 ・生活リズムを整える取組の実施（大和3部会）【健康安全部】 ・楽しく，運動量がある体育科の授業改善【健康安全部】 ・自分の目標に向かって挑戦することができる体育科等の授業改善【健康安全部】 ・児童同士が「見る」ことを大切にした体育科の授業改善【健康安全部】 ・自己決定の場がある体育科の授業改善【研究部】【健康安全部】														
働き方改革	教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，学校行事及び総合的な学習の時間の内容を精選することを通して，児童に向き合う時間数を確保するとともに，職員の健康を維持する。		教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，行事等の精選をし，児童に向き合う時間を確保する【教務部】 ・行事等の内容を精選し，行事に係る練習時間数を減少する。 ・総合的な学習の時間の内容を精選する。 ・各部が担当する行事を精選する。 ・関係機関・団体と連携する取組について，学校が担う業務を軽減する。 ・定時退校を実現する。 ・見通しを持った業務を行う。	〇市の方針「勤務時間上限の目安時間『上限の目安時間及び特例的な扱い』」に記載されている内容を達成する。 「上限目安時間・45時間/月を超えない。・360時間/年を超えない。 「特例的な扱い・720時間/年を超えない。・45時間/月を超える月は，1年間に6月まで。・連続する複数月のそれぞれの期間について，1カ月当たりの平均が80時間を超えない。 【評価時期】（9月末・1月末）	勤務時間外の在校時間 全教職員年間360時間以内，月45時間以内の割合	100%	47%	55%	【50%】	D	・11月から1月までの時間外勤務時間の平均時間は，44時間2分である。10月までの平均時間よりも増えている。教材研究や業務にあた る時間を確保したり，毎月の準学校衛生委員会において，業務改善できることはないか出し合ったりする等，継続して実施してきた。また，各会議等の前には事前に主任層との打ち合わせをしながら効率的に会議を進められるよう努めた。しかし，月によっては，生徒指導事案の取組等で時間外勤務時間が増えたり，職員によっては80時間近くまで時間外勤務したり，80時間を超える時間外勤務となる職員もいる。	・引き続き学校行事等の精選や業務にあたる時間の確保に努めたり，準学校衛生委員会で業務改善できることの協議を行う。 ・生徒指導案件への取組，教職員の状況や業務内容等を見ながら，連携体制や協力体制をつくっていく。	○			児童の姿から，これまでの教職員の努力の成果を感じる。健康には十分気をつけ，今後も働き方改革への取組，業務改善を継続してほしい。

【自己評価 評価】
A：100％（目標達成）　B：80％（ほぼ達成）<100
C：60％（もう少し）<80　D：（できていない）<60

イ：自己評価は適正である。
ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。